

MAPPSS

Newsletter from MAPPSS

頑張れ、ミュージアム。

CONTENTS

参加報告

京都府ミュージアムフォーラム
第5回合同研修会
「デジタルアーカイブ全体研修」

ミュージアムIT屋さん、現場を征く！

街へと繰り出す
「市民のデジタルアーカイブ」

小千谷市ひとまち文化共創拠点 ホントカ。

ミュージアムIT屋さん 現場を征く

ジャパンサーチ上のデータを展覧会
や館運営に活かす方法

福岡市博物館

ミュージアムIT屋さん 現場を征く

大学生が展示ガイドにもたらした「逆
転の発想」

ロマンスクアミュージアム

ミュージアムITピック

簡単すぎる！
最新3Dスキャンの現場を体験

北海道博物館

No.25

2026.05



早稲田システム開発株式会社

東京都新宿区高田馬場4-40-17
TEL:03-6457-8585
<http://www.waseda.co.jp/>

参加報告

京都府ミュージアムフォーラム第5回合同研修会 「デジタルアーカイブ全体研修」

全国の博物館を巡るにつけ、デジタルアーカイブ構築への気運の高まりを実感する昨今。とは言え、人員もノウハウも、そして予算も十分でない中小規模のミュージアムにとっては、話はそう簡単ではありません。「着しようにも、何からどう手を付けてよいのか…」という困惑する声は、私たちが想像する以上に多く聞こえてきます。

そんな中、京都府で注目すべき試みが。文化政策室が運営する博物館ネットワーク「京都府ミュージアムフォーラム」が中心となって、府内のミュージアムのデジタルアーカイブ事業を支援するプロジェクトを実施したのです。文化庁のInnovate MUSEUM事業を活用して実現したもので、参加館には専門家や専門企業を派遣。写真の撮影や

画像データの利活用などの実務に関する直接的な指導やサポートを受けながら、作成したコンテンツを公開するまでのプロセスを迎えることができます。

これは意欲ある中小規模館にとっては、まさに待望の取り組みでは…ということで、2月9日に行われた京都府立京都学・歴彩館で開催された全体研修にお邪魔しました。一連の取り組みの締めくくりとして開催された研修会は、講義とワークショップの二部構成。ワークショップでは、参加者たちのあちこちで所属の垣根を越えた対話や議論が自然発生。熱気あふれる会場の様子は、最終ページで写真を交えてご紹介します。

今の時代、知識だけならネットで入手できるものの、実作業では疑問もトラブルも生じます。

また、デジタルアーカイブの構築は補助金を確保して外部に委託する方法もありますが、予算が尽きればそこで止まってしまう。そんな場合でも、走り始めた事業を持続させるには、やはりスキルとノウハウが必須。その点、各分野の熟練者から直接学べるのは、中小規模館で決定的に不足している「実践」を学ぶ上で実に有意義な機会となるわけです。

デジタルアーカイブは、「はじめの一步を踏み出すきっかけ」と「自走できる枠組み」が何より大切。それを再確認する貴重な時間となりました。



活気に満ちた会場の写真は
最終ページにて。





街へと繰り出す「市民のデジタルアーカイブ」

～小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。

まち全体を屋根のない博物館と見立てるエコミュージアム。この考え方が登場してから長い時間が経過していますが、近年のデジタルアーカイブの普及に伴い、改めて注目を浴びています。新潟県小千谷市に誕生した複合文化施設「ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」では、『コトノハ』と名付けられた独自のコミュニケーションツールを使った市民参加型のデジタルアーカイブが順調に発展中。先日開催されたワークショップでは、施設内のツールを街なかで活用する試みが実施されました。それは、デジタルアーカイブ時代のエコミュージアムづくり。今回は、住民参加のスタイルが上手く機能して利活用の気運が高まる「市民のデジタルアーカイブ」について、実際にワークショップに参加して学ぶことができました。



小千谷市 ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。とは

越後三山を望むロケーションに2024年9月に開館した複合施設で、図書館と郷土資料館の機能のほか、市民活動の場や子どもの遊び場までカバーする共創型の多目的拠点。ユニークな名称は「本とか(ほかにもいろいろあるよ)」と「ホントか!?(驚き・発見)」をかけたもので、大きく特徴的な屋根

(ルーフ)を持つ建物の内部には個性的な空間が広がっています。

室内は書架や展示台を備えた可動式の資料空間(フロート)とすることでイベントスペースに早変わりさせたり、顔認証やICタグを効果的に活用して本の貸出を円滑にしたり。また、レーザー加工機や3Dプリンタなどのデジタル工作機器を備えたモノづくりスペースなど、それぞれにテーマを持つ活動の場(アンカー)が9室も用意されています。何かに没頭したり、逆に何もせず



にゆっくりと寛いだり、誰かと交流を深めたり…と、市民が自分らしく自由気ままに過ごせる場所。地元こんなスポットがあるとは小千谷市の方々が羨ましい、そんな思いがよぎる素敵なランドマークです。



さて、「ホントカ。」の郷土資料館部分は「博アンカー」内にあります。コンパクトな展示スペースに入るとセンサーが反応し、この地の方言を使った温かみのある案内が迎えてくれます。

まず、下の展示ケースの中には、江戸時代の小千谷文化の一端が集められています。赤い布に開いておかれた冊子には、小千谷の伝統文化である錦鯉を描いた美しい絵が。その上に置かれた丸い物体は、地球儀ではなく、天体の動きを現した天球儀。江戸時代から続く麻織物「小千谷縮」で栄えた小千谷の教育水準の高さがうかがえます。

その後ろ、タペストリーのように壁に吊るされているのは、何と浮世絵です。現代人の目で見ると「えっ、日本が世界に誇る芸術作品なのにもったいない！」と声が出そうになりますが、学芸員によればこれは絵紙(えがみ)と呼ばれる地元文化。小千谷縮の商人が江戸などから持ち帰った浮世絵をつなぎ合わせて、ひな祭りなどの飾りとして使われたそうです。小千谷らしさが詰まった展示ケースは、眺めるだけで心が温まります。

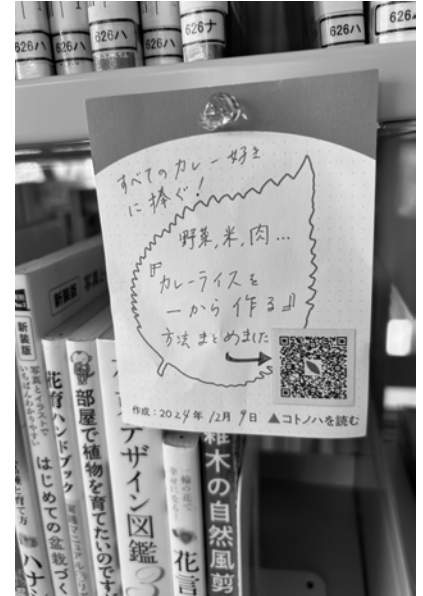
市民による情報が ひとりで動き出す、 「コトノハ」の仕組み

すべての展示をじっくりと味わいたところですが、今回の目的はワークショップへの参加。ここでは、その前提となる「ホントカ。」の大きな特徴をご紹介しますおきましょう。

この個性的な複合文化施設の中でも、ひととき異彩を放っているのが「コトノハ」というツールを使った独自の仕組みです。コトノハとは、本棚や展示室で使われているさまざまな形状のカード。POPのように掲出したり、しおりのように本に挟んだり、館内のあちこちで見かけます。

実物はこんな感じです。印刷されているQRコードを読み取ると、市民の皆さんが投稿した記事を読めるページにアクセスできるのですが、この投稿情報がなかなか充実しているのです。

たとえば、このQRコードを読み込むと、カレーライスづくりに関連するオススメ本を紹介した記事が開きます。市民の方が作成したもので、記事の最後にズラリと並ぶ本の概要から各書籍の詳細情報へと飛ぶ



ことができます。こんな感じで、一人ひとりの市民が自分の情報を発信できる仕掛けがコトノハなのです。

誰かが「いま関心のあること」をコトノハを使って発信すると、「ホントカ。」に遊びに来た別の誰かがその情報に触れる。つまり「ねえねえ、これ知ってる?」「なにに? 面白そう」という家族や友人との会話のような流れをカードで再現しているのですが、日々SNSで交わされている見知らぬ人々とのやり取りにも似ていますね。



コトノハにアップするコンテンツには、社会通念から外れるものでない限り、特に制約はありません。「自分のまち・小千谷のお気に入り」を挙げた個人ブログ的な記事から、郷土資料館が開催したイベントのアーカイブまで、多様な情報が並列的に収録・公開されています。手づくり感たっぷりの温かみある枠組みに、市民が思い思いに提供した投稿記事と、郷土資料館が正式に発信しているオフィシャルな情報が分け隔てなく並べられている点は、コトノハの見逃せないポイントです。



おぢや「おいしい」マップをつくらう!

コトノハは「ホントカ。」が開発したオリジナルの仕組みですが、その守備範囲は館の外へと広がりつつあります。それが、今回参加したワークショップ。参加者たちが、コトノハを物理的に小千谷の街へと連れ出したのです。

市民の多くは、地元・小千谷に精通しています。たとえば「この店のこの料理が美味しいよ!」という情報を知っていれば、そこから1枚のコトノハを作れるわけです。各自がそれを持ち寄って地図に貼っていけば、市民オススメのグルメマップが出来上がります。地図に貼られたコトノハからQRコードを読み込むと、そのお店の推薦者が書いたレビュー記事が開きます。グルメ雑誌、あるいはグルメサイトに似ていますが、プロの記者や匿名のレビュアーではなく地元民、もしかしたら身近な知り合いが書いた記事かもしれませんので、リアリティがグッと増します。誰もが発信できるツールを使って作る、地元の方々との「とっておき情報」のデータベース。これだけでも価値ある情報源になるのですが、今回のワークショップではさらに一歩進みました。お店を紹介する内容が書かれたコトノハを、市内で営業中のお店の実際に役立ててもらおうというのです。

使うのは、ワークショップ内で参加者が作成したコトノハ。その場で作ったものなので、

もちろんお店の人は知りません。事前に連絡を入れることなく、2つのグループに分かれてレストランへと出かけます。筆者が参加したグループが向かったのは、「ホントカ。」から徒歩10分ほどのイタリアンレストラン。お昼時は過ぎていましたが、店内はまだ賑やかです。スタッフの方の手が空いた時間を見計らって、来店目的を説明。「ホントカ。」から来たこと、コトノハで小千谷の「おいしいマップ」を作っていること、そこでお店を紹介していることを説明すると、その方も「ホントカ。」のことをよくご存じとのこと。コトノハを店内に貼り出して欲しいと打診したところ、ご快諾いただけました。

このコトノハには、「オープンしてからずっと通ってます。自分へのご褒美です」という推薦者の言葉が載っています。地元の人が地元の店を勧めるメッセージだけに、「おいしいマップ」経由でこの情報に辿り着いた人は「行ってみようかな」と思うことでしょう。また、実際にこのレストランで食事を済ませた後、壁やテーブル、カウンターのコトノハに気付いてQRコードを読み込んだ人なら、仲間を見つけたような気分になるはず。感激して「自分も始めて





みようかな」と考えてくれるかもしれません。

今回のワークショップにはファシリテーターがいて、図書館のスタッフも同席していましたが、これを繰り返して市民に浸透していけば、美味しいレストランを見つけたらコトノハを作って「ホントカ。」に貼りに行く…という動線ができるかも。グルメ系に限らず、市内の好きな場所、お気に入りの場所が次々にコトノハが貼られていけば、そのまま誰かの「行ってみたい」という気持ちを刺激することになります。繰り返しになりますが、同じ地元を愛する仲間からの情報であることは、大きな決め手になるでしょう。

もちろん、お店だけではなく、資料館で紹介している史跡や歴史的建造物などでも同様です。市の文化財係などがデジタルアーカイブに登録している場所についてコトノハを作れば、公式情報と市民情報が両方公開されることになります。そのまま情報が増えていけば、公式と非公式、行政と市民、フォーマルとカジュアルがシームレスにつながる複層的なデジタルアーカイブが育つことになるのですね。

コトノハは、「ホントカ。」が展開する市民デジタルアーカイブ。今回のワークショップは、コトノハを街なかに活用する試みでしたが、これは「インターネット上で閲覧できる場」

であるデジタルミュージアムの枠組みを拡張する可能性を示唆しています。「ホントカ。」を中核施設として、どこからでもアクセスでき、誰でも閲覧できるデジタルデータの利活用を促す紙のカード。市内のさまざまな立場の人々が参画できる共創型のデジタルアーカイブを、手触り感のあるアナログなアイテムを介して実現している点も小粋です。

デジタルアーカイブと言えば、ともすれば博物館の資料や文化財、公に価値が認められた文化資源のためのものと捉えがちです。運営に市民のチカラを活用する試みは珍しくありませんが、専門的な知見を持たない彼らの情報を公の情報として扱うには、多くの課題が立ち塞がります。ましてや「誰もが好みに発信してよい場」となると、なかなか難しいものがあります。

コトノハは、こうしたハードルを乗り越えたデジタルアーカイブということになりますが、その背景には「ホントカ。」が確立した「情報を3段階に分ける」という考え方があります。まずは、指定文化財など、市民の総意を受けて保全・承継の義務を負う情報。次に、地域で受け継いでいくのが望ましい文化資源の情報。そして、こうしたハードルを取り払い、市民が持ち寄る生活情報。この3番目がコトノハの本質となるわけです。

この3つの段階も、たとえば文化財なら自治体の公式見解と市民の思い出エピソードなど、それぞれ垣根を越えての相互乗り入れも可能。それぞれ単体としても機能しますし、後からテーマ付けして結びつけることもできます。このように、よい意味での緩やかさを持ち込めば、クールな印象を与える博物館のデジタルアーカイブの温度が一気に温まり、「私たちのデータベース」となりそうです。

ネットとリンクする紙のカード、市民が書くメッセージ。それぞれは派手なアイデアではありませんが、うまく使えば目からウロコの仕組みを作れるという好事例。もしかしたら、デジタルアーカイブの常識をひっくり返すような可能性を秘めているかもしれません。



小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。
<https://hontoka.city.ojiya.niigata.jp/>





ジャパンサーチ上のデータを展覧会や館運営に活かす方法

～ 福岡市博物館

幅広い分野のデジタルアーカイブと連携し、多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォーム、ジャパンサーチ。国主導で運営されているこの巨大な統合ポータルでは、見つけた画像やメタデータを登録して「自分だけの展覧会」を作成・公開できるギャラリー機能を備えています。これは一般利用者に広く提供されている機能ですが、自由に使えるということは、もちろん博物館側で利用することも可能。そんなわけで、ここでは単なるWeb展覧会に留まらず、館運営にも好影響をもたらす印象的な活用事例をご紹介します。

特別展『魔法の歴史スコープ～見 つめてみよう福岡の今～』

2026年2月21日(土)から4月12日(日)の期間、福岡市博物館でユニークな展覧会が開催されました。人と環境の関わりをテーマに「2000年後の未来からの視点や過去からの視点で今を見つめ直す」という設定で、「魔法の歴史スコープ」の視点を切り替えながら展示を楽しむという仕掛け。特定の地域の長い歴史を辿る展覧会は時代軸に沿って出来事を追うのが一般的ですので、趣向を凝らした見せ方です。

展示の中にもちゃんと「取扱説明書」が掲載されている、歴史の望遠鏡。今回は初の試みということで、歴史スコープも記念すべき「初代モデル」となります。設定されているテーマは、森、川、海、町の4つ。スコープは、それぞれのテーマの中で照準を切り替えながら、古代から現代までを俯瞰することができるわけですね。

これは面白そう…ということで、今回は特別に取材させていただきました。当日はオープンの前日で、スタッフの皆様が走り回るような忙しさ。もちろん、お邪魔に



ならないよう隅っこの見学でしたが、ひとつ気になることがありました。というのも、この特別展では学生が制作した作品も展示されたのですが、これらは作品制作に先立って館側がジャパンサーチのギャラリーを作成し、その資料群から着想を得て制作されたというのです。これも興味深い試みということで、ご無理を承知でお話を伺いました(スタッフの皆様、ありがとうございました)。

ジャパンサーチのギャラリー機能

ジャパンサーチのギャラリーは、公開されているコンテンツをテーマや人物ごとにまとめて紹介するWeb展示機能です。今回は、この機能を通じて、同館の所蔵資料のうち江戸時代の花に関連する資料を集めたコレクションが公開されました。それ



がギャラリー『“博”花繚乱 ～福岡市博物館に咲き乱れる花々～』で、【研究対象としての花】【江戸時代の人々と花】【もっと深掘り】【クイズ】という4つのテーマで構成されています。

たとえば【研究対象としての花】には、薬種商で本草学者でもあった内海蘭溪がまとめた『本草正画譜』という江戸時代後期の植物図譜や、第11代福岡藩主の黒田長博が残した植物図鑑『本草図』が収録されています。一方、【江戸時代の人々と花】で紹介されているのは、衣服や絵画、道具の中に登場する花々。同じ花でも、切り口が違えばクリエイターはまったく異なるアイデアをつかむでしょうから、閃きが欲しい制作者にとってはこれだけでも見応え十分のはずです。

このギャラリーは制作に臨む学生たちのために作成されたのですが、館内でお話を伺うと、実は「こっそり公開していた」のだとか。ジャパンサーチのトップにある新規ギャラリー紹介のコーナーに敢えて掲載しないなど、特に大きな告知をしないまま公開したわけです。ガチガチの限定公開にはしなかった、この緩さも面白いですよ。

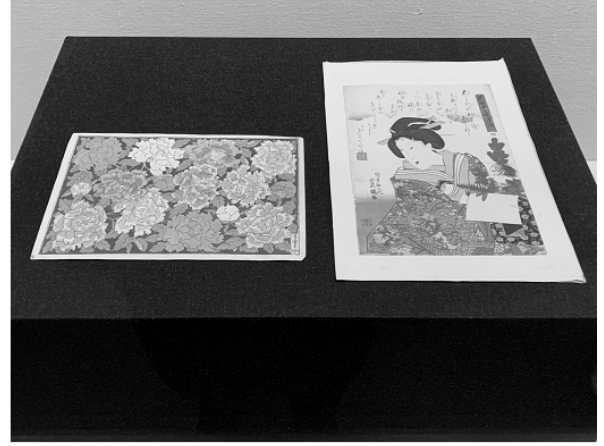
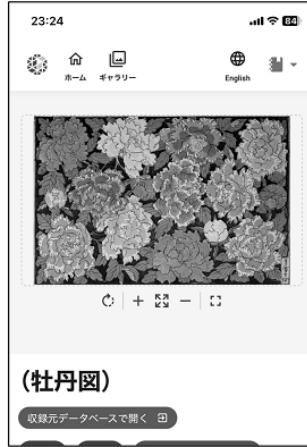
江戸の絵師と 令和の学生の 競作も！

さて、学生たちは実際にギャラリー『“博”花繚乱 ～福岡市博物館に咲き乱れる花々～』に掲載された資料の中からモチーフを選び、実物資料の見学会を実施。インスピレーションを得て自らのモチベーションを高め、イメージーションを膨らませて作品を制作しました。取材当日は、こうして完成した作品の展示作業の真っ最中だったのですが、今回は花がテーマということもあって気分が明るくなるような作品がズラリ。見るからに若々しくエネルギーにあふれたものばかりで、圧倒されました。

なお、特別展の開催期間は『花爛漫(らんまん)の江戸時代』という企画展も同時開催中。この展覧会では、ジャパンサーチ上のデジタルデータを通じて学生に刺激を与えた「原作」も一緒に展示されていました。つまり、江戸と令和のクリエイターの作品を、同時に同じ空間で観ることができたのです。まるで時代を超えた競作のようにも見えて、不思議な感覚に包まれました。

では、実際に見比べてみましょう。左の写真の大きな牡丹が学生の作品で、中央がこの学生が参考にしたと思われるジャパンサーチのギャラリー画面、そして右が実際に展示されていた元の資料です。オリジナルは、江戸時代の文人・亀井少楽の『牡丹図』という資料。こうして並べると、ジャパンサーチが



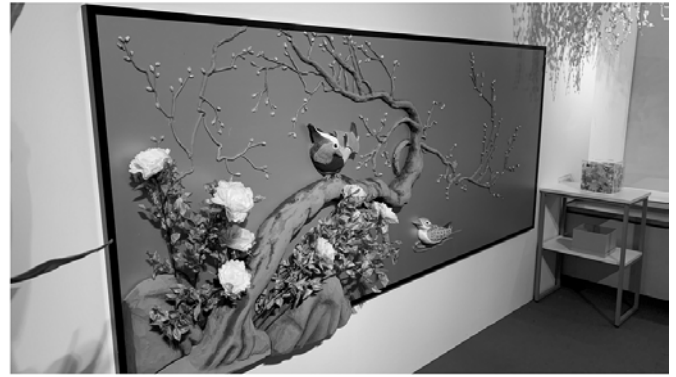


江戸時代の画家と令和の学生をつなぐ「歴史スコープ」の役割を果たしたことが分かりますね。

次も牡丹図ですが、モノクロ印刷となるのが残念なほど明るく華やかな作品です。左が学生による作品、中央が参照したジャパンサーチ、右の写真の左側に写っているのは歌川芳盛の『牡丹図』。古の絵師のセンスを再構築したフラワーアートのように、まさに競作といった趣です。

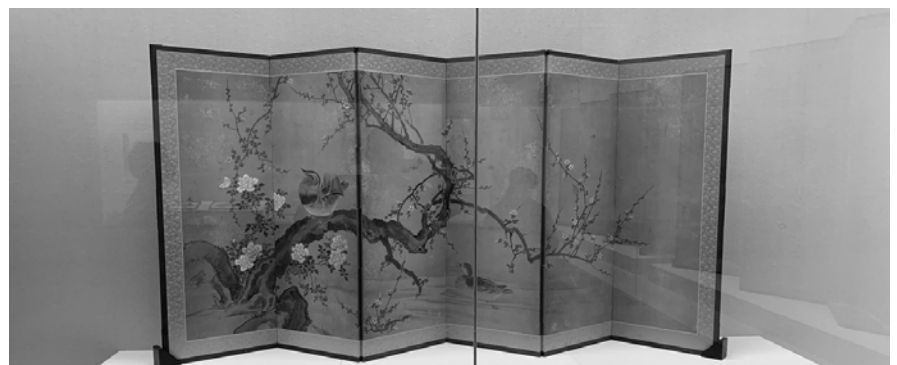
このように、オリジナルの作品が平面であるのに対し、学生の作品の多くは立体的なものも時代性を感じます。それを特に感じたのが『梅牡丹鶯鶯図屏風』という作品です。2つの作品を比べると、学生作品では凹凸が効果的に使われています。また、作品の奥に小さな箱が設置されているのにお気づきでしょうか。この箱にはたくさんの花が入っていて、来館者が作品に花を貼ることができる仕掛け。数百年の時を超えて「みんなで満開にする」というコラボレーティブな作品へと生まれ変わったわけです。

なお、私がお邪魔してこの写真を撮影したのが開幕前日の2月20日、その1週間後には写真左のように咲き始め、3月19日には右のように花びらがはみ出すほどの満開になったとのこと(博物館の方から写真を送っていただきました)。



ちなみに、オリジナルの『梅牡丹鶯鶯図屏風』も企画展示室で実物を観ることができました。歴史を感じる重厚な色味と屏風の

形状を見ると、2つの時代の特性がさらに際立ちますね。





ところで、ジャパンサーチのギャラリー画面には「収録元データベースで開く」というリンクがあります。これをクリックすると、I.B.MUSEUM SaaSで構築された福岡市博物館の収藏品検索ページが開きます。ここには展覧会詳細ページへのボタンが設置されていて、展覧会の詳しい情報も閲覧することができるようになっていました。異なるサイトの間をまたぐ形で感覚的に回遊できる情報動線の設計が秀逸ですね。

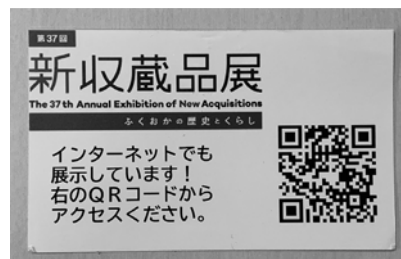
それを象徴するのが、感謝状とともに寄贈者に贈られる、QRコードを掲載した名刺サイズのカードです。新収藏品を紹介する展覧会に正装で参加する寄贈者もおられる通り、代々受け継がれた大切な品を博物館に託す時にはいろいろな想いが去来するもの。館としては展示で応えたいところですが、膨大な資料を所蔵する中では、常設はなかなか叶いません。そこで、このカードからギャラリーを辿れば、いつでも「会う」ことができます。しかも、ジャパンサーチは国のプラットフォームであるだけ

に、博物館で大切に保管されていることが伝われば、お喜びいただけるのではないのでしょうか。江戸の絵師と、令和の学生。寄贈者と、今は手から離れてしまった資料。ジャパンサーチのギャラリーを単なるデジタルデータのWeb展示ではなく、2つのリアルをつなぐ橋という新たな活用法を生み出した福岡市博物館の試みには拍手を贈りたいと思います。「博物館のデジタルアーカイブは、実はこんなに温かくなれる」という気付きを得ることができた取材でした。

「Web展覧会」を超えた ギャラリー活用法

リアル空間とデジタル空間を上手に接続する福岡市博物館は、ギャラリーを6種類も公開しているジャパンサーチの「ヘビーユーザー」でもあります。ここではもうひとつ、注目の活用法をご紹介します。

同館では、毎年開催する新収藏品展で展示される資料群を、ジャパンサーチでギャラリーにまとめて公開しています。展覧会の会期中に図録として閲覧できるのはもちろんですが、実は終了後もギャラリー上に残り続けます。これは単に展示作品をアーカイブするだけでなく、寄贈者への感謝のしるしでもあるのです。



- ① ジャパンサーチギャラリー 「“博”花繚乱～福岡市博物館に咲き乱れる花々～」
<https://jpsearch.go.jp/gallery/FCM-XD9QBRYMnWj#1pc3wk51p8ryxb>
- ② ジャパンサーチギャラリー 「第37回新収藏品展 ふくおかの歴史とくらし」
<https://jpsearch.go.jp/gallery/FCM-OKrPJpgVgad>
- ③ 福岡市博物館特別展「魔法の歴史スコープ～見つけてみよう福岡の今～」
<https://museum.city.fukuoka.jp/exhibition/special/2025/magical-history-scope/>
- ④ 福岡市博物館企画展示「花爛漫（らんまん）の江戸時代」
<https://museum.city.fukuoka.jp/exhibition/626/>





大学生が展示ガイドにもたらした「逆転の発想」

～ ロマンスカーミュージアム

ロマンスカーミュージアムを運営する小田急エージェンシーには、「大学生だけで構成された架空の部署」をコンセプトとした社内コミュニティがあります。『わかものがかり』と名付けられたこの「部署」では、先ごろ専修大学・文学部ジャーナリズム学科で広告コミュニケーションを学ぶ平井信太郎ゼミとコラボ。2026年1月31日から2月23日にかけて、産学連携による館内イベント『ロマンスカーミュージアムでかくれんぼ』を開催しました。大学生たちのアイデアが随所に活かされ、通常の来館者サービスの動線を逆手にとったユニークな協業プロジェクト。今回は、同社の知野英佑子さんに舞台裏を伺いました。



仕上がったようです。外部の視点、若者たちの発想は、どんな楽しさを提供してくれたのでしょうか。実際に体験してきました。

『ロマンスカーミュージアムでかくれんぼ』を体験してみた

一瞬「実際の新宿西口の写真かな」と思う左の写真は、展示されているジオラマです。こうして見ると、本当によくできていますね。その隣に掲出されていたのが、右の『ジオラマパークでかくれんぼ』の解説看板。今回のイベントの遊び方の説明と、小田急線沿線の街を舞台にした全5問の問題のタイトルが分かりやすくまとめられています。ポケット学芸員は、番号を入力すると館が配信するコンテンツを利用できるスマホ

外部の視点が持ち込んだ音声ガイドの新発想

わかものがかり×平井ゼミのプロジェクトでは、「ロマンスカーミュージアムにワカモノが行きたくなるアイデア」をテーマに全5回のワークショップが実施されました。ロマンスカーミュージアムを訪問してのフィールドワークに始まり、館内で感じたことをワークシートに記録して感想を語り合いながら、それぞれにアイデアを考案。中間発表とミュージアム側からのフィードバック、最終案のプレゼンテーションを経て、採用企画が決定しました。知野さんによれば、学生たちの提案はどれも新鮮で、最終的には実に10案近いアイデアが集まったそうです。

同館2階のジオラマパークで開催された

『ロマンスカーミュージアムでかくれんぼ』は、I.B.MUSEUM SaaSが提供する展示ガイドアプリ(ポケット学芸員)を活用し、音声ガイドと謎解き捜査(?)を掛け合わせた斬新な館内イベント。「実在の場所を模した大きなジオラマ内にいる人が喋ったら面白いかも」「音声ガイドを情報源に、その人の居場所を探すゲームにしたら楽しいのでは」といった感じで、ひとつのアイデアに別のアイデアが加わり、充実の内容へと



アプリ。通常は、展示資料の近くにパネルが設置されていて、そこに記された番号を入力すると音声や解説文、画像などにアクセスできます。これが多くの博物館で実際に運営されているスタンダードな使い方なのですが、学生たちは「逆転の発想」でアプリを活用。まず先に番号を入力することで情報を授けられ、それを頼りにジオラマ展示の中にあるはずの特定の人物や場所を探索する…という動線を作り出したのです。なるほど、まさに「かくれんぼ」ですね。

では、チャレンジしてみましょう。いざポケット学芸員に番号「1」を入力してみると、『駆け上り「スーパーヒーロー」(ヒント編)』という情報が表示されました。つまり、「このジオラマのどこかに隠れている男を探し出せ」というミッションになっています。ジオラマの中の彼は、「高層ビルの屋上」「小田急百貨店やビックカメラなどの看板が見える」とアピールしています。ヒントを手掛かりに探索すると、おっ、いましたいました！写真でわかりますでしょうか、ビルの壁！

目的の場所を発見すると、近く小さな札があります。ここに記された番号が、解答編にアクセスする暗号。スマホを取り出し、確認した番号「11」をポケット学芸員で入力すると、答え合わせの音声ガイドを聞くことができます。テキストとともに表示される写真も、確かに同じ場所ですね。無事に正解し、ジオラマの街の豆知識もゲットです。

電車は進んで、次の舞台は下北沢。ライブ



ハウスの音響係を探すとという問題2を解いたら、札にある「12」を入力すると、答え合わせが始まります。こんな感じで、ヒント編

に10を加えた番号が解答編となるのですが、ジオラマ内の札をきちんと見つけて番号を読み取るのが正しい攻略法です。



「これは楽かも」と思った矢先の3番目・江ノ島水族館では、少し苦戦してしまいました。片瀬江ノ島駅と江ノ島は分かるのですが、イルカショーが行われる水族館は確か駅から西に向かって進むはずだから…あれ？と何度か躓きつつ、ようやく見つけました。うん、確かにヒント編の内容通り、大人と子どもの家族連れで賑わっていますね。

次はさらに難易度が上がります。番号「4」は、あの小惑星探査機『はやぶさ2』が生まれたJAXA相模原キャンパスです。相模原市なら、ロマンスカーミュージアムが隣接する小田急線の海老名駅から近いはず…なのですが、見つかりません。そのままジオラマ内を彷徨い続けて約15分、遠くの山すそでようやく探し当てました。気持ちは焦り、額にはうっすらと汗も浮かび、本当に搜索気分。個人的にジオラマ展示は大好きですが、こんなに凝視したのは人生初かもしれません。

せっかくなので、ズルせずにちゃんと見つけた証拠を。ほら、写真奥の山の右下の方、小さな札が見えますか？

最後は、新年のお楽しみとなっている箱根駅伝でお馴染みの箱根湯本駅。ヒント編では、その近辺を走る水色のたすきを着けた駅伝ランナーを探せとの指示が。これも苦勞して、ようやく発見。いや、ここまでたっぷり小一時間、かくれんぼゲームを堪能してしまいました…。

実は筆者は30年近く小田急線沿線に暮らしていますが、地元民の目で見てもジオラマは実によくできています。風景だけでなく、それぞれの街の空気感のようなものが伝わってくるからでしょうか。下北沢の活気、多摩川を渡った先の少しゆったり感のある街並み、江ノ島の明るい雰囲気。しかも、ジオラマ内を行ったり来たりしているうちに、照明が落とされて全体が夕方になったり、昇る「朝日」に照らされたり。街の息吹まで再現するこだわりには、本当に感心しました。



ジオラマに込められた想いと協働の成果

鉄道ファンや家族連れに大人気のロマンスカーミュージアムですが、知野さんによれば、このジオラマは沿線に息づく生活まで表現することで小田急電鉄をより身近に感じてもらうことを目指して作られたそうです。道路や建物だけでなく個性豊かな人々の姿が多数置かれているのは、ミュージアムの願いが込められているのですね。そんな小田急エージェンシーの想いは、学生の皆さんにしっかりと伝わった様子。展示ガイドアプリを「逆方向」に使うジオラマの街を走り回るアイデアは、多くの来館者を楽しませたことでしょう。

彼らにとっては、大学で学んでいることを現場で実践する素晴らしい機会。一方で、

多くの博物館が課題とする若年層の集客という観点では、接点を広げるチャンスとなりました。知野さんのお話では、実は配信されたヒント編・解答編の原稿も、学生たち自身が制作してくれたのだとか。しかも、固有名詞や権利関係を軽くチェックすればそのまま使えるクオリティで、学芸員にも大いに刺激となったそうです。なお、ナレーションを読み上げたのは、小田急エージェンシーの社員とロマンスカーミュージアムのスタッフの皆様。つまり、館・学・民のコラボレーションの成果だったわけですね。

『わかものがかり』では、今後も新たな企画に挑戦していく意向とのこと。ロマンスカーミュージアムは開館して4年の新しい博物館ですが、「若者との接点づくり」においては先駆者の一人と言えるかもしれません。今後の取り組みに注目したいものです。



① ロマンスカーミュージアム <https://www.odakyu.jp/romancecarmuseum/>

② わかものがかり×専修大学平井ゼミの産学連携施策「ロマンスカーミュージアムでかくれんぼ」を開催！
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000042.000028164.html>

専修大学平井ゼミ×わかものがかり ロマンスカーミュージアムにわかものを呼び込むアイデアを考えよう！

- ③ • Day1 フィールドワーク編 <https://flight-room.com/article/2424/>
- ④ • Day2 アイデア考案&中間発表編 <https://flight-room.com/article/2472/>
- ⑤ • Day3 最終発表編 <https://flight-room.com/article/2508/>





簡単すぎる! 最新3Dスキャンの現場を体験

～ 北海道博物館

デジタルアーカイブに取り組む館が急増する中、ネット上で収蔵品の3Dデータを見かける機会も増えてきました。その資料の裏側の様子など、ふだん展示室では見られない部分まで知ることができて、利用者としては嬉しい限り。ただ、3Dデータの作成は専門的なスキルが必要ということで、予算をかけて外部企業などに委託するケースが大半です。フォトグラメトリーを学んで自らデータを作り込む凄腕の学芸員もおられますが、ソフトウェアの使いこなすだけでなく後工程を想定した撮影方法など一連の流れに精通する必要があり、誰でも気軽に、簡単に…というわけにはいかないのが実情です。

「写真を撮るように、もっと簡単に作成できればよいのに」。多くの方が呟くそんな言葉は、実はすでに現実のものになりつつあります。そこで今回は、「誰もが使える3Dスキャナー」を期間限定でレンタル導入したと聞きつけて、北海道博物館を訪問。博物館資料学を担当する学芸員の鈴木あすみさんにお話をうかがいつつ、開発メーカーにも取材を敢行し、3Dデータ作成の自作の可能性を探ってみました。

学芸員がサラリと作った土偶の3Dデータ

まずは、次の二つの資料をもとに作成された3Dデータをご覧ください。「3Dモデリングデータを見る」から「ビューアで見る」を

クリックすると、ゆっくり回転する3Dモデルが表示されます。

この3Dデータは専門業者に委託したわけではなく、鈴木さんご自身が作成したとの



こと。しかも、資料の撮影からデータの作成、収蔵品管理システムに登録するまでの一連の作業が、30分ほどで完了したそうです。特に3Dを専門的に学んだわけではないのに、わずかな時間でここまでクオリティのデータを作ってしまうとは、どんな機材を使えばそんなことが可能なのでしょうか。

文字サイズ: 小 田 大

検索トップ > 資料情報



3Dモデル

土偶-遮光器土偶-

目次 : ドクワシヤコフキドクワ
 収蔵番号 : 042098
 標本 : 000011
 分類 : 考古
 コレクション名 : 野野原蔵コレクション

解説 : 目の奥部分が小さくした遮光器土偶の頭部。遮光器土偶の中でも最も素直なものである。中央に舟形、縁部に髪を纏に似つけた表現がある。北海道では遮光器土偶の出土が少なく、終末期の貴重な資料である。

ビューアで見る




拡大画像・高精細画像を閲覧する際はPCからアクセスしてください。スマートフォンからは利用できません。
 ※本システム上のテキストや画像の著作権・複製・加工等はご遠慮ください。
 ※本システムでは利用状況の把握のためにアクセス情報を収集しています。詳細はこちらをご覧ください。

土偶-遮光器土偶- (42098-11)
https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/det.html?data_id=226872

文字サイズ: 小 田 大

検索トップ > 資料情報



3Dモデル

土偶-遮光器土偶-

目次 : ドクワシヤコフキドクワ
 収蔵番号 : 042098
 標本 : 000012
 分類 : 考古
 コレクション名 : 野野原蔵コレクション

解説 : 北海道では出土例が少ない遮光器土偶の下半身。胴は長くくびれ、すぼまった足や女性股が表現されている。右足に土玉が入っている。土偶を飾らすと股が陥るようにつくられており、視覚的に高い土偶である。

ビューアで見る




拡大画像・高精細画像を閲覧する際はPCからアクセスしてください。スマートフォンからは利用できません。
 ※本システム上のテキストや画像の著作権・複製・加工等はご遠慮ください。
 ※本システムでは利用状況の把握のためにアクセス情報を収集しています。詳細はこちらをご覧ください。

土偶-遮光器土偶- (42098-12)
https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/det.html?data_id=226873



北海道博物館に導入されたのは、ニコンの「COOLSCAN 3D」という3Dスキャナー。資料を載せるターンテーブルと照明がセットになった「撮影ボックス」と、カメラとプロジェクターによる「カメラユニット」から構成された機器だそうです。

それでは、ここからは実際にデータを作成された鈴木さんからご提供いただいた現場の写真とともに、作業の手順を辿ってみましょう。

まずは資料をターンテーブルの上にセットします。ここに載せられないようなサイズの資料の場合でも、資料の状態や工夫次第で撮影は可能とのことでした。

機器をPCにつなぎ、専用のアプリケーションを起動。撮影を開始すると、テーブルがゆっくりと回り始めます。適切な位置で自動的に撮影してくれるので、作業者はPCのディスプレイでさまざまな角度から撮られた画像を確認するだけです。

撮影した画像をもとに3Dデータを作成。アプリケーション上で完成データの内容を確認し、必要に応じて調整したら、あとはデータを保存するだけ。



3Dデータを保存したら、あとはそのままI.B.MUSEUM SaaSにアップロードするだけ。正常に登録されたことを確認したら、はい、これで完了です。お疲れ様でした……って、本当に簡単なんですわね！

撮影からこの状態までマウスを数回クリックしただけなので、「誰でも3Dデータを作れる」という表現も大げさではありません。

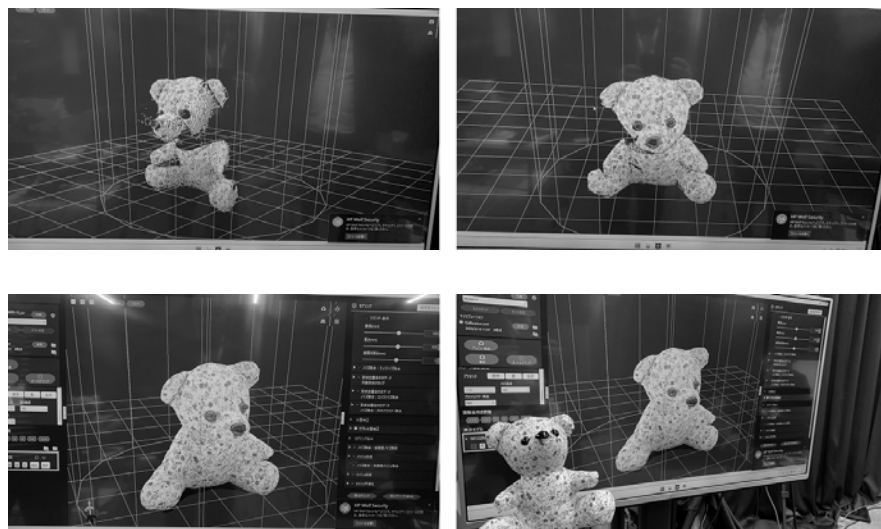
特に迷ったりする場面もなく、「楽しく作成できました」と鈴木さん。このデータは実際に公開されているので、今後は「利用者の皆様が3Dデータを検索しやすくする工夫を検討したいですね」とのことでした。

3Dスキャナー実物を体感

この簡単さであれば、3Dの知識ゼロの筆者でも作れそう。ぜひ体験してみたいと考えて、開発元のニコン様にお邪魔しました。

ご挨拶の後、簡単な説明を受けて、さっそく作業を開始。布に柄がある熊のぬいぐるみをスキャンしてみることにしました。前述の鈴木さんの作業に倣って、ターンテーブルに設置して撮影をスタート。自動的にテーブルが回転し、適切な角度で写真撮影が





行われて、みるみるデータが出来上がっていきます。

専用アプリケーションの画面には、データが作成される様子がリアルタイムで映し出されています。静止画では伝わりづらいのですが、まるで粉が集まって立体物が少しずつ出来上がっていく様子は、とても未来的。眺めているだけでワクワクさせられます。

撮影が終わったら、アプリケーション上でデータを調整。実物と並べて見ると、こんな感じです。まったく問題なさそう！

自分で試してみると想像以上に簡単で、楽しんでいるうちに作業は終了。その後、今回の取材にご対応くださったご担当の方にお話をうかがいました。

3Dデータは多様な角度から撮影した写真を組み合わせて立体的に見せるわけですが、このスキャナーにはさまざまな技術が使われているそうです。たとえば、立体物の起伏を正確に表現しつつ、表面の質感や風合い、模様まで精緻に再現するのは、かなり高度な技術が必要とか。確かに、絵付けのある焼物などは立体感も大切ですが、繊細で微妙な表情を持つ絵の精度も妥協できませんね。そこで、この3Dスキャナーでは、対象物に投影した格子や

ストライプなどのパターン光の歪みを解析することで形状を取得する「構造化光」方式を採用。高い精度の測定を実現した上で、ニコン製のカメラが得意とする高品位なテクスチャを活かすわけです。

これを手動で行おうとすると、本来はかなりの作業時間が必要となりますが、撮影ボックスとカメラユニットの組み合わせで自動化を実現。後処理のパラメータ調整には専用ソフトウェアを用意することで、フォトグラメトリーなど専門的な知識やスキルがなくても3Dデータを作成できる環境を実現したわけですが、理論上は1点につき最短13分で作成可能とのことでした。

実は、高度な品質を求めない場合は、フォトグラメトリーを使った自作もそこまで難しい作業ではないようなのですが、その場合でもITスキルや経験値が必要とのこと。その点、この3Dスキャナーなら、位置合わせをはじめフォトグラメトリーで必要とされるコツの部分まで「代行」することが可能。3Dデータ作成を手軽に内製化することができるわけです。

作業工程については、本当に説明すべきことがないほどの簡単さ。これだけの機器でするので館単独での導入は厳しくても、たとえば「エリアに1台」「都道府県に1台」でも配置されれば、対象資料を設置場所に持ち込むか、あるいは逆に3Dスキャナーがエリア内の各館を巡回するような仕組みを作ることも可能なのでは。地域の館で共有できれば、デジタルアーカイブのコンテンツ力は大きく上がるはず…夢が広がりますね。

ちなみに今回、鈴木さんが作成された一連のデータは、実際に公開される予定とか。データベースに登録されれば、下記URLの検索画面で「3Dモデル」の「あり」にチェックを付けるだけで検索できます。ご興味がおありの館は、ぜひチェックを。



北海道博物館 収蔵資料検索
<https://jmapps.ne.jp/hmcollection1/>



ニコン3Dスキャナー COOLSCAN 3D
<https://www.jp.nikon.com/business/products-and-services/3d-creation/product-basic-info.coolscan-3d/>



京都府ミュージアムフォーラム第5回合同研修会 「デジタルアーカイブ全体研修」開催風景

表紙の「参加報告」で紹介した熱気あふれる研修会、その様子を写真でお伝えします。研修前半は3人の講師によるリレー講義。テーマは「持続可能な資料撮影・デジタル化の方法」「これからの博物館に求められるデジタルアーカイブ～活用を見据えたデジタル化～」「多様な事例から学ぶ、デジタルアーカイブの始め方と続け方」でした。



研修後半のワークショップの風景です。撮影の実演あり、「見せ方」の実例あり、デジタルアーカイブのアクションプランの作成にチャレンジしたり…と、内容は盛りだくさん。参加者は4つのグループに分かれ、それぞれ2つのワークショップに参加しました。



京都府ミュージアムフォーラム
<https://museumforum.pref.kyoto.lg.jp/>



編 集 後 記

デジタルアーカイブは文字通りデジタルデータを集積したのですが、提供する側、利用する側ともに生身の人間。完成・公開に至るまでには、実はとてもアナログな努力を強いられる世界でもあります。そこで、今回のMAPPS Pressは改めて「作る苦勞と使う楽しさ」にスポットを当てる特集号となりました。街に繰り出すワークショップ、江戸の絵師と令和の学生のコラボ現場、若者たちの斬新なアプリ活用アイデア、3Dデータ

制作の内製化への可能性を探る試行錯誤。そして冒頭と末尾には自治体の取り組みを紹介しました。

補助金制度などが充実する昨今、デジタルアーカイブ事業に乗り出す博物館は確かに増えました。初期データの作成を外部に委託すれば手早く構築はできますが、「作る苦勞」がゼロになるわけではありません。多くの場合、一気にデジタル化できるのは収蔵品の一部ですし、館内にノウハウが蓄積されない点も気になります。つまり、「残りのデータをどうするか」「増える資料をどうするか」という

課題からは逃れられないわけです。私もお話をさせていただいた京都府の研修会は、その解決策を模索する取り組みでもあります。都道府県が事業を組み立て、市町村の小規模館とノウハウを共有するという手法は、ひとつの解となり得るかもしれません。

「作る」技術を身に付け、社会の「使う」ニーズを燃料とすれば、持続的に「自走」できる。今後も、現場の皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

(U)